宝の海をいつまでも
～舳倉島・七ツ島の海女の文化と磯根資源の管理について～

石川県漁協女性部　海士町支部
早　瀬　千　春

1．地域の概要

私たちが日頃、海女漁の主な拠点としている舳倉島（へぐらじま）は、能登半島の北部、輪島市の沖合約48㎞に位置する、島の周囲約5㎞、面積約1㎢、海抜12.4mの平坦な島である（図1、写真1）。島の付近の海域は対馬暖流の影響下にあり、また、大陸棚が広がるため好漁場となっており、沿岸・沖合漁業の基地として大きな役割を担っている。1974年より、輪島港からの定期船が1日1往復運航されている。舳倉島には、定住する人と夏だけ居住する人がいるため、人口は冬期で約100人、夏期で約300人になる。また、地理的に日本海の真ん中に位置するため、渡り鳥の休憩の場所となっており、バードウオッチングを目的とする来島者が多く見られる。島内には、消防・医療用以外に車はなく、移動手段は三輪自転車または徒歩という、環境にやさしい島である。

同じく海女漁の拠点となっている七ツ島（ななつじま）は、能登半島と舳倉島のほぼ中間に位置し、約5㎞四方に広がる7つの小島・岩礁群（大島・竜島・狩又島・御厨島・荒三子島・赤島・烏帽子島）である。1970年代まで大島、荒三子島、御厨島には漁期の夏場に漁民が生活していたが、現在はすべて無人島で、上陸には環境省と北陸財務局の許可が必要である。

他にも、七ツ島の西に位置する嫁礁（よめぐり）と呼ばれる岩礁域も漁場としている。

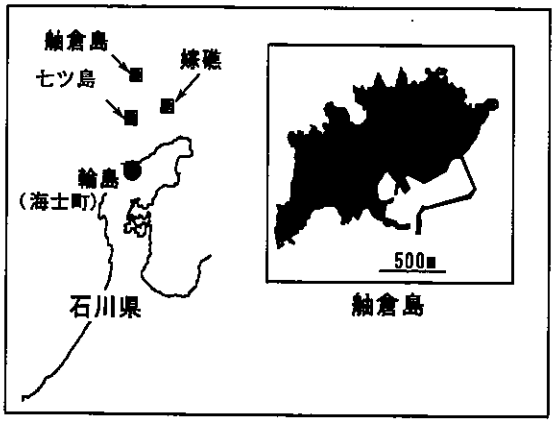


図1　位置図

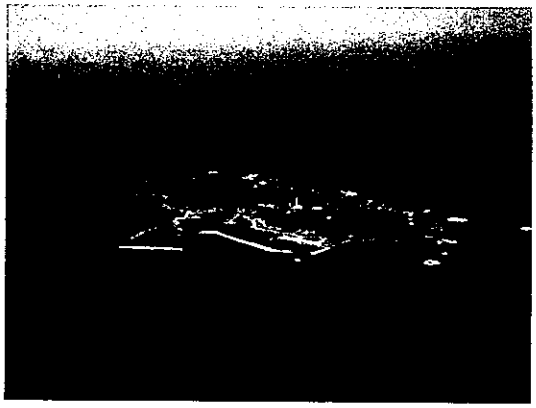
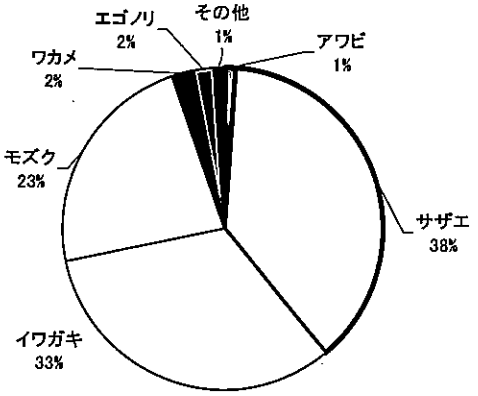


写真1　舳倉島の全貌

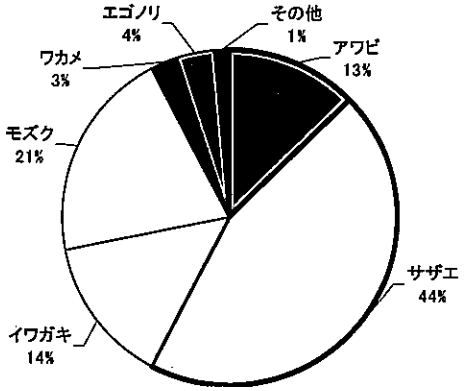
2．漁業の概要

輪島の海女漁は、石川県漁協女性部海士町支部に所属する総勢195名の海女によって行われている。平成21年の漁獲量は430トン、水揚げ金額は2億4,200万円となっており、

石川県漁協輪島支所の総漁獲量の7.8%、水揚げ金額の10.3%を占めている。漁獲対象種は、アワビ、サザエ、イワガキ、モズク、ワカメ、エゴノリなどである。アワビとサザエを合せた漁獲量は全体の39%、漁獲金額は全体の57%を占めており、海女漁の重要な資源となっている（図2）。



漁獲量（平成 21 年）
約 430 トン



漁獲金額（平成 21 年）
約 2 億 4,200 万円

図 2　海女漁における水揚げ状況（平成 21 年）

3．研究グループの組織と運営

私たち石川県漁協女性部海士町支部は、前身が昭和 26 年頃に結成された、とても歴史のある組織で、現在は 323 名と県内最大の部員数で活動を続けている。主な活動は、県内で開催されるイベントでの鮮魚・干物等の販売、農山漁村での食育活動である。部員のうち 195 名が海女漁に従事しており、年齢は 17 歳から 93 歳と幅広い。

4．研究・実践活動取組課題選定の動機

舳倉島・七ツ島の海女漁は、歴史が古く、島には日本全国でも類を見ない珍しい生活が残っており、近年国内外から注目を浴びている。そこで、島の自然やそこで暮らす私たち海女の歴史・生活等を情報発信することで、後世までその文化を伝承していくことが必要と考えた。

また、海女漁を後世に残すためには、重要な漁獲対象であるアワビ・サザエの資源の維持・増大を図る必要がある。アワビの漁獲量のピークは、昭和59年の39トンだったが、その後右肩下がりに減少している。単価は漁獲量の減少により、一時1万円/kgを超えた時もあったが、平成15年以降、低下し続けている。サザエの漁獲量のピークは平成10年の349トンであったが、その後、漁獲量、平均単価ともに低下傾向にある（図3）。このままの状態が続けば、海女漁を生業としていくのはとても厳しい状態である。このため、アワビとサザエの操業規制と種苗放流を主体とした資源管理の取り組みを持続的に実施した。

また、これら磯根資源の水揚げ金額の減少をカバーするため、新たな商品の開発と漁獲物の付加価値向上の取り組みを行うことにした。

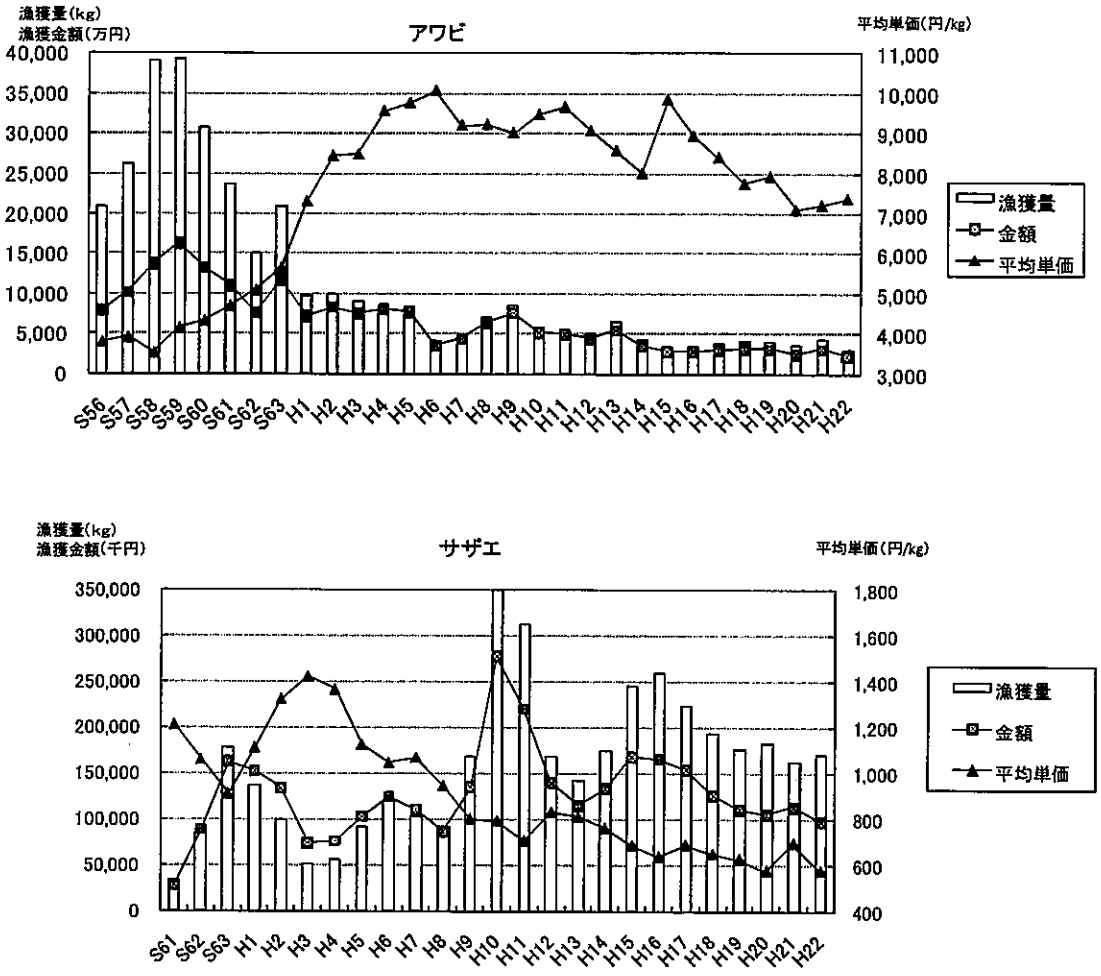


図３　アワビ・サザエの漁獲状況の推移

５．研究・実践活動状況及び成果

①海女の文化の伝承

恵み豊かな舳倉島・七ツ島とそこに息づく海女の暮らしは、「里海」の優れたモデルとして近年注目を浴びている。大学などの研究機関や報道機関により、学術的見地から舳倉島・七ツ島の里海の営みについて調査が行われており、彼らからのインタビューや調査に協力してきた。

例えば、地元新聞社が中心となった「舳倉島・七ツ島自然環境調査団」は、金沢大学、金沢学院大学、日本野鳥の会、石川県自然史資料館などで構成されており、2008 年 5 月～2010 年 4 月にかけて舳倉島・七ツ島を訪れており、その調査報告書には島の自然や私たち海女の歴史・文化、舳倉島での生活が紹介された。また、国連大学高等研究所は、大海女と呼ばれる長老の海女と比較的若手の海女にインタビューを行い、私たち海女の海の中での漁の様子とともに映像記録にとりまとめ、昨年行われた第 10 回生物多様性条約締約国会議（COP10）の関連行事等で紹介してもらった。

こうした情報発信を通じて、改めて私たち海女の歴史と独自の生活スタイルが貴重なものであることを再認識した。

【海女の歴史と生活についての概要は以下のとおり】

私たちの先祖は、1569 年に九州筑前国鐘崎（かねがさき）から渡ってきた海士又兵衛（あまのまたべえ）ら 13 人の男女がルーツといわれている。彼らは春に能登に渡来して、海女漁を行い、漁期が終わる秋になると九州に帰るという生活を送り、地元民から「西国海士（さいごくあま)」と呼ばれていた。昔から能登は海産物が豊富だったため、彼らは次第に輪島の地に定着し、人口も増えていった。1649 年に彼らが献上する「のしあわび」を珍重していた加賀藩主に「土地拝領願書」を差し出し、現在の輪島市海士町の土地を拝領したといわれている。

戦前までは、舳倉島に定住する人はほとんどなく、本土にいる海士町民全員が6月初旬に一斉に舳倉島へ渡り、夏場の約4ヵ月間アワビやサザエ等を採集し、漁期が終わる10月に再び本土へ帰るという「一斉渡島」を行っていた。しかし、漁船の性能の向上、生活様式の多様化、夏期の定期船の就航などにより昭和30年代後半には姿を消し、定住する人もでてきた。

また、当時の生活様式の特徴的なものとして、「灘回り（なだまわり)」と呼ばれる一種の行商がある。11月頃になると、一家全員が舟の中で生活しながら海産物を農村に持って回り、一年分の米、野菜などと交換するものである。昭和10年頃からは陸からの「灘回り」に変化したものの、各家庭ごとに得意先があり、代々引き継がれていた。農村に海産物を持って行き、海産物の食べ方などを伝授することは食育の原型と考えられる。

現在の海女は、ふたつのグループに分かれている。ひとつは、舳倉島に周年にわたって定住しているか、もしくは夏期の漁期時に舳倉島に居住する海女である。現在56名の海女がおり、そのうち半分が70歳以上の高齢の海女である。定住する海女は、夏期のアワビ・サザエの漁期以外は、季節に応じた海藻を採取しており、道路脇に天日干しする光景が見られる（写真2)。

写真2　舳倉島の生活風景

もうひとつは、本土の海士町に定住し、漁期中は毎日舳倉島・七ツ島・嫁礁に出漁して夕方戻ってくる「通勤海女」と呼ばれる海女である。現在は139名の通勤海女がいる。

海士町は、漁業権行使規則により、舳倉島・七ツ島・嫁礁の潜水漁に排他的権利を持っている。海士町自治会の取り決めで海女になることができるのは、海士町に生まれた者か、嫁いできた者だけで、その操業権は代々継承されている。現在は、19歳から93歳までの海女が従事しており、アワビ・サザエの他、ワカメ・イシモズク・エゴノリなどの海藻や、イワガキ・ナマコなどの多彩な磯根資源を利用している。

②資源管理

石川県漁業調整規則では、アワビについて、県下全海域で10月1日から12月31日までを採捕禁止期間とし、殻長10cm以下の個体は年間を通じて採捕禁止となっている。

その他、海女が所属している磯入組合の中で話し合いを行い、自主的な資源管理のルールを決めている。

まず、アワビとサザエの漁期は7月1日から9月30日までの3カ月間のみとし、磯入り時間は、かつては8時間となっていたが、今では午前9時から午後1時までの4時間に制限している。さらに、休漁日は海士町自治会役員が集まって決定し、すべての海女が一斉に休漁している。

こうした制限に加えて、資源回復を目的として、平成13年に舳倉島の南西部海域に禁漁区を設けた。それでも漁獲量の減少に歯止めがかからないため、平成20年には禁漁区を舳倉島北西部海域に移し、面積を拡大した。この海域周辺には従来からの好漁場が多く含まれており、私たちの中でも賛否両論があったが、稚貝密度の高い区域であり、天然母貝の保護による資源の回復を期待して、減収も覚悟でより厳しい資源管理を行っている。

また、舳倉島と七ツ島周辺では、アワビとサザエの種苗放流を毎年継続して行っている（写真3）。

アワビの種苗放流に関しては、昭和46年から行っており、今年は7万個を放流した。水産試験場の協力のもと、毎年放流後の追跡調査を行っているが、残念ながら漁獲サイズまで生き残った個体はなかなか見つかっていない。過去には、放流適地の検討のため、毎年放流場所を変える試みも行ったり、在来種の放流を行った時期もあったが、目に見える効果はなく、根本的な資源の増大には結び付いていない。

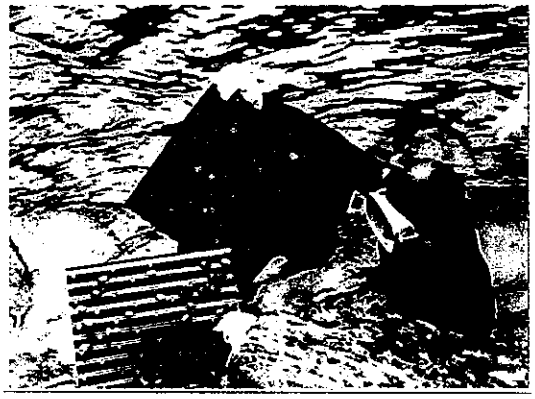


写真3　アワビの種苗放流

これまでの追跡調査の結果等から、初期減耗の主たる原因のひとつに、タコやヒトデなどの外敵生物による捕食があることがわかった。タコに食べられたアワビの死殻には円錐状の穿孔した跡が残るため、タコによる捕食だとわかる。追跡調査では、多くの死殻にこうした食害の跡が見られた。

そこで、タコの活動が活発でない時期にずらして放流したこともあったが、上手くいかなかった。そのため、放流前には、放流場所を中心にタコやヒトデの駆除を行うことにした。駆除した数は毎年、タコは約5,000尾、ヒトデは約300個体にものぼる。それでもいたちごっこで、放流直後の減耗を完全に防ぐことはできないが、少しでも初期減耗を減らすため、外敵駆除活動は今後も続けていきたいと考えている。

③新商品開発と付加価値向上

資源管理や種苗放流は大切な取り組みとして持続していかなくてはならないが、漁獲

量が減少している現状のままでは、将来、海女漁で生活していくことが難しくなる。そのため、磯根資源の保護を進めるうえで、減少し続ける収益を補填するために、新たな加工品の開発や今ある資源の付加価値の向上に取り組むことにした。

まず、平成17年から舳倉島沖合の海水を利用した天然塩づくりを開始した。舳倉島の沖合2km、水深30mの地点で取水した海水を用いて、舳倉島にある作業場で製塩している。海士町自治会では、この塩を「宝の海」と名付け、舳倉島の民宿、輪島の朝市や土産物店、インターネットやイベントなどで525円（100g）で販売している。「宝の海」は、直火を使わない低温蒸発自然結晶法と呼ばれる製法で作っており、30℃前後という低温の電熱を照射し、約1週間かけてじっくりと蒸発、濃縮させている。この製法で海水6トンにつき約150kgの塩が精製できる。

「宝の海」を利用して加工品も製造している。これまで、自分たちの採ったワカメは、そのまま加工業者に出荷していたが、平成20年から、自らワカメの湯通し、塩漬け、芯抜きといった作業を行い、天然塩の「塩蔵ワカメ」を製造している。手間のかかる作業だが、少しずつ収益が上がっており、平成21年度は約1,300万円の収益があった。

さらに、輪島港で水揚げされたイカと「宝の海」を材料に、魚醤油の「いしる」を試作し、今年初めてイベントにおいて600円（500ml）で販売した。評判は上々だが、まだ試作段階ということで、今後改良を加えて本格的に販売していく予定である（写真4）。

写真4　開発した商品（左：天然塩「宝の海」、右：魚醤油「いしる」）

付加価値向上の取り組みとしては、私たち海女の採ったアワビとサザエを「輪島ブランド」として売り出すために、平成21年9月に「輪島海女採りあわび」と「輪島海女採りさざえ」の名前で商標登録した。アワビは1個ずつ「輪島海女採り」と書いた楕円形のタグを取り付け、サザエは出荷ケースに商標シールを貼ってPRを行っている（写真5）。アワビは大半を地元で販売しているが、9月になると他地域へも出荷する割合が増えることから、タグの取付により輪島産を積極的にPRをすることができた。また、舳倉島・七ツ島で漁獲されるサザエは殻の突起が際立って見栄えがよく、身の部分にも砂が噛んでいないことから評判も高く、商標シールにより関西方面への出荷の際に「海女採り」であることが認知されている。

写真５　商標登録

６．波及効果

資源管理の取り組みによって、アワビとサザエが増加するような目に見える成果は残念ながら出ていない。平成22年のアワビの漁獲量は約３トン、サザエの漁獲量は約170トンと、依然として低水準である（図 3)。しかし、持続的な取り組みによって、海女一人一人が常に資源管理の意識を持って、日々、海女漁を営んでいる。また、新たな加工品の開発や今ある資源の付加価値の向上に取り組むことにより、少しずつではあるが、収入の増加につながっている。

最近では、舳倉島は「里海」のモデルとして世界から注目を集めている。自然からの豊かな恵みを巧みに取り入れた舳倉島の暮らしに、先人の知恵が随所に見られ、改めて誇りを持って海女として生きていく覚悟が生まれた。人の暮らしと自然の営みが密接な島であり、環境に配慮し、海と共生する海女のライフスタイルは、里海の風景そのものである。里海の原型の姿を残す舳倉島・七ツ島の自然とそこに息づく漁村の風景を未来に残し伝えていきたい。そして、海からの恵みである大切なアワビとサザエを守っていき、海女漁を後世に継承していきたいと思う。

７．今後の課題や計画と問題点

操業規制と種苗放流を主体にした資源管理は、今後も継続していくが、同じことを繰り返していては資源の増大は見込まれない。禁漁区域の拡大や禁漁期間の延長など、もっと厳しい資源管理が必要と考えている。海女漁においては、１世紀余りの歳月の中で、水中眼鏡、ウエットスーツ、足ひれが徐々に導入され、操業形態が変化してきている。漁獲効率が極端に上がらないよう、そのたびに資源管理の話し合いを行い、ルールを決めて海女漁を続けてきた。今後も技術の進歩により、漁獲効率が上がる可能性があるが、絶えず話し合いをしながら、適正な資源管理に取り組んでいけるようにしたい。

近年、舳倉島・七ツ島では、国内外からの漂着物や大気汚染物質の問題が大きくなってきた。毎年、海岸清掃を行って少しでもゴミを減らす努力をしている。それでも海岸には多くのゴミが漂着する。豊かな島の姿が壊されないよう、国内外に向けてゴミを捨てないよう訴えていくような啓発普及活動も必要だと思う。